

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

春号
17年4月
No.47

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル カトリック会館7F
発行人／吉岡秀紀
TEL&FAX075-223-2291 E-mail: bukatsu@kyoto.catholic.jp
Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp/bukatsu/>

「あなたはどう思うのか」と問われている

～ 世間と福音 ～

根津 正幸

「島崎藤村の『破戒』の中で主人公の被差別部落出身者丑松は「世間に入れて貰いたい」と述懐している。当時「世間」には被差別部落出身者は入れなかったのであり、「世間」は差別されていない人の集合体とされていたのである。しかし「世間」はまた差別の温床でもある。「世間」はどのような組織にもあり、それは自ずから差別的で排他的な組織となっている」（*『近代化と世間』）

「世間に入れて貰いたい」という丑松の述懐は、私の若いころの願いでもありました。そのため、「世間」の目から見られたときの自分を恥じるという、倫理観を内面につちかってきたように思います。当時は生活のなかに普遍的な価値基準がなかったので、「世間」の基準から自分が逸脱することのないように、「世間」と自分の間にあるズレをたえず微調整しながら生きていました。「世間」の人たちの眼差し、世間の目にとられるという状況のなかで、自己規制をはたらかせてきたわけです。

そのように生きてきた私が洗礼を受けたのは30代後半でした。教会と出会うまでの生き方、それは自分ではよく考えてきたように思っていました。実は「みんなが欲しがるもの」を「自分が欲しいもの」と思い込んで生きてきたのでした。ある文化人類学者が『「経済成長が私たちの幸せをもたらす」という単純な原理への信仰。この信仰は長く日本社会を支配してきた」と指摘していましたが、まさにそのような生き方でした。いまから考えると、「他人（ひと）が欲しがるものを自分も欲しがってれば安心」という生き方でした。そのことは、モノの世界の話だけではなく、人生の意味や幸福についても同じでした。

しかし、「世間」に縛られながらも、それに反発する自分もいました。そんななかで心惹かれたのが部落問題でした。部落問題へのかかわりは、私が「世間」と向き合い、自立していく歩みとなりました。差別の温床でもある「世間」のなかで差別に苦しみ、問題意識をもちながら自己を解放していった人たちとの出会いと交流によって、私は自分を取り戻していくことができたのです。

私が受洗して4年後の1993年に「浦和教区部落問題を考える会」が発足し、そのときから教区の取り組みに参加することができました。1995年に「浦和教区部落問題委員会」が設立され、現在「さいたま教区部落差別人権委員会」として差別問題に取り組んでいます。古い資料ですが、1936年に行われた被差別部落の人口調査によると、さいたま教区のなかでは埼玉県が約32,000人、群馬県が約30,000人、栃木県が約15,000人、茨城県が約5,000人となっています。委員会の活動は学習会とフィールドワークを中心に行い、関係のできた被差別部落を訪問し、それぞれの地域の歴史や現代の課題について学んでいます。

また昨年、「出会いと対話のつどい」を始めました。部落問題を日常生活のなかで考え実践していけるように、自分の言葉で部落問題を語るができるようになることを目的にしました。第一回のつどいの発題者をお願いした丸山三枝子さんは、仕事と子育て、そして民生委員をしながら地域で暮らし、差別解消のためにたたかっています。丸山さんはこんなことを言っていました。「子どもがゲームに熱中して『死ぬ』と言うことがあります。私はその言葉が嫌いです。そんなとき、子どもに『言葉に気をつけなさい。それはいつか行動になるから』と言っています」。これはマザー・テレサの言葉です。丸山さんはキリスト者ではありませんが、暮らしのなかでマザー・テレサの言葉を大切に生きていたと思います。

懐が深いという感じの丸山さんですが、「自分は生きていていいのか」と自問自答し続けた若いころの体験を話されたときには心が痛みました。丸山さんは、差別的な言葉によって傷つけられたからこそ、言葉を大切にしようとしていたのです。ですから「言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから」と子どもに諭していたのではないかと思います。「自分は生きていていいのか」という言葉は、かつてハンセン病国賠訴訟東京原告団団長の笹(こだま)雄二さんから聞いた言葉と重なります。笹さんは「病気になる前から、自分は生まれてきてよかったのかとずっと悩みながら生きてきました」と言っていました。「自分は生きていていいのか」「自分は生まれてきてよかったのか」という言葉は差別の厳しさを表しています。完全には理解することができない言葉です。しかし、私たちが差別を受けることの痛みへの想像力を深めることができるのかが問われていると自覚させられました。

丸山さんが伝えたマザー・テレサの言葉は、「思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。……」とあります。差別を受けた立場でこの言葉を聞くと、心に響くメッセージになるのではないのでしょうか。

人間の生活は、文化とよばれるさまざまな行動様式、生活様式、知的思考にしたがって営まれています。社会的に一般化された行動様式は社会規範と呼ばれます。この社会規範は人間の行動を外側から規制し、同時に、人間の行動を内側からも規制しています。井上忠司さんは著書『「世間体」の構造』のなかで、「わが国の人びとは、おおむね『世間』

に準拠して、はずかしくない行動をすることを、社会規範の基本においてきた…。〈世間の目〉から自分をはじめという独特の社会心理を、わが国の人びとの多くは、個人の内面につちかってきた」と述べています。ですから、私たちのなかにある「あたりまえ」を疑う必要があるのです。

私は現在、群馬西ブロック（高崎教会・新町教会・富岡教会・藤岡教会）の協力助祭としてかかわっています。ある年の堅信の勉強会で、上野正子さんという方を紹介することにしました。それは、上野さんからお聞きした「恥でないことを恥だと思う。それこそが恥である」という言葉を、若い人たちに伝えようと思ったからです。この言葉には、私たち一人ひとりが生活をふり返り、自分を見直し、呪縛から自由になっていくための大事なメッセージがあります。

上野さんはキリスト者で、鹿児島県にある国立療養所星塚敬愛園で生活しています。日本カトリック部落差別人権委員会が東京と福岡で開催したハンセン病問題のシンポジウムでシンポジストをお願いしたご縁で、人として、信仰者として大切なことをたくさん教えていただきました。病気になるということは、けっして恥ずかしいことではないのに、なぜか社会から恥ずかしいこととされ、しかも病気になった自分自身も恥ずかしいことと思わされてしまった。「恥でないことを恥だと思う。それこそが恥である」、この言葉を心に刻んで上野さんはハンセン病国賠訴訟の灯を一貫して掲げ続け、原告団の精神的な柱となりました。

「世間」との関係について考えていたとき、ある聖書の箇所が目にとまりました。神殿税についての話です。「一行がカファルナウムに来たとき、神殿税を集める者たちがペトロのところに来て、『あなたたちの先生は神殿税を納めないのか』と言った。ペトロは『納めます』と言った。そして家に入ると、イエスのほうから言いだされた。『シモン、あなたはどう思うのか。……』」（マタイ 17:24-25）。私たちもペトロのように問われているのではないのでしょうか。「〇〇さん、あなたはどう思うのか」と。「世間」の人たちはこう言っていますが、「私はこう思います」と答えたいものです。

* 阿部謹也著『近代化と世間』



「すがりつくのはよしなさい」

【ヨハネによる福音書 20 章 11～18 節】

吉岡秀紀(大阪教区司祭)

みなさんがこの拙文を読んでくださるころ、わたしはカトリック大阪教会管区 部落差別人権活動センター(部活センター)の所長を退いております。いただいておりますさまざまな務めからもすべて離れていることでしょう。

いわば自分としっかりと向き合う時間が必要になったのです。

部活センターに関わらせていただくようになって、多くの人びととの忘れられない出会いがあり、さまざまな体験があり、どこを向けば、どこへ行けばよいのかわからなかったころからすれば、どんどん世界が広がっていきました。大きな喜びの連続でした。気がつけば、たくさんの務めをいただいていた。根は怠惰なのに、人とかかわり、人とつながる場をできるだけつくりたかったのかも知れません。しかし、多くの務めに囲まれていることは、やがて自分と向き合わないための迷路のようになっていたのだと思います。どこかで「こりゃアカン」と悶々としていましたが、その答えは突然、具体化しました。それがこのたびの「結果」です。

新たな門出を祝う春。わたしにとって、この春は安堵と不安と苦々しさに満ちた、新たな出発となったように思います。

おそらくこれで最後となるでしょう、この「シリーズ：聖書^{いのちのことば}を生きる」。身辺はバタバタしており、とても文章を書けるような状態ではないのですが、何も申しあげずに去るのもズルいと、書き出してしまいました。

主の復活を祝う春。ヨハネ福音書 20 章から、いわゆる「空^{から}の墓」をめぐる箇所を読んでみましょう。

イエスは、当時「最も不名誉な死」とされていた十字架刑で殺されました。苦しむ人、悲しむ人を見過ごさず、みずからのいのちを差し出しつづける生きざまをとおして、イエスは「人が独りでいるのは良くない(創世記 2.18)」という神の思いを証しました。いわば十字架は、イエスの生きた道を人びとの前に明らかにするものでした。罪状書きに記された「ユダヤ人の王」。これこそ、この「みじめでおろかな敗北者」こそが、すべての人を立ち上がらせる救い主であるという宣言となったのです。

そのイエスの遺体が葬られた墓に、マグダラのマリアは「週の初めの日、朝早く、ま

だ暗いうちに (20.1) 向かいます。

福音書の大きな特徴のひとつに、女性が大きな役割を果たしているということがあります。イエスの母マリア、シリア・フェニキア出身の母親、サマリアの女性、そしてマグダラのマリア……。

当時のユダヤ社会で、女性が前面に出るということは考えられませんでした。福音書でさえ、わざわざ女性と子どもを除いて、「男」だけを「人の数」として数えています (マタイ 14.21、15.38 他 参照)。女性や子どもをひとりの人と見なさず、男性だけを「人」と見なす感覚は「当然のこと」として浸透してしまっていたのでしょうか。だからこそ、神が女性をとおして救いを明らかにされるのが、つまり、低められた女性の側に立つイエスの姿勢が鮮烈なまでのリアリティを生んでいるように感じられます。

さて、マグダラのマリアです。よく知られた福音書の登場人物ですが、実はそれほど詳細な記述はありません。わたしたちキリスト者がこの人の名を聞いて思い浮かべるのは「イエスから七つの悪霊を追い出していただいた」というエピソードですが、そのことを記しているのは、マルコ 16.9 とルカ 8.2、それもわずかにふれているのみです。

マリアはそれほど重要な人物ではなかったのか？いえ、むしろ福音書が記された初代教会の人びとの多くが、マリアをよく知っていたからわざわざ記していないのかも知れません。むしろ、諸説ありますので詳述は割愛いたしますが、マグダラのマリアは初代教会において、とても重要な使命を果たしていたのだと考えられます。

初代教会におけるマリアの認識は、わたしたちがいだきがちな「罪深い女」「あわれな身の上をイエスに救っていただいた」というものとは、まったく異なるように受けとれます。

いずれにせよ、マグダラのマリアの生きかたはイエスとの出会いによって大きく変わったということは間違いのないかと思われれます。だからこそ、イエスの死はマリアにとって大きな悲しみでした。

「空の墓」を前にマリアは泣きます (20.11)。イエスと出会い、希望に燃えて歩みをもにした日々から突如イエスを奪われて、悲しみに沈むマリアは、おそらくイエスの墓に生涯仕えようと思っていたのでしょうか。しかし、その墓に遺体はなかった。

マリアは死者の中にイエスの姿を探します。だから復活したイエスに出会ってもそうとは気づかなかったのです。

その時、イエスは「マリア」と名を呼びます (20.16)。聖書において名前を呼ぶという行為は「他のだれでもない、あなたを呼ぶ」という、神からの召しを表します。名を呼ばれたマリアは「振り向」きます (20.16)。この「振り向く」も動作の描写にとどまらず、心の動きをも示します。死から生へと、いのちへと向き直る。このとき、マリア

はイエスが生きておられることを確信したのです。

喜びに満たされたマリアの言動については記されませんが、イエスは「わたしにすぎりつくのはよしなさい」と言い、“宣教”にマリアを遣わします。

「すぎりつくのはよしなさい」……ちょっと冷たく感じるかも知れません。ですが、復活を信じた、つまり、わたしたちにさきがけてイエスに終わることのないのちが実現したことを知ったマリアは、イエスのあとを追うだけでなく、キリスト者としてみずからのことばで福音を宣べ伝えるようになったのではないのでしょうか。

「すぎりつくのはよしなさい」。突き放すのではなく、神の国の福音＝イエスの生きざまを知る者として、立ち上がる。マグダラのマリアは“自立したキリスト者”として新たな歩みを踏み出したのだと思います。

わたしにとってもそのような一歩となりますように、お祈りいただけましたら幸いです。

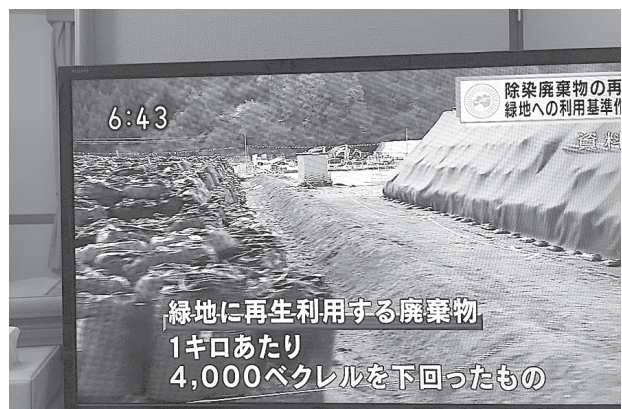
これまでありがとうございました。またどこかで……。

福島、6年目の現実

太田勝（福音の小さい兄弟会）

福島は復興したのか、政府はなぜ帰還を急がせるのか、フレコンバック山積みの故郷に帰られるのか、これ以上被ばくさせるな！というアピールの報告会が3月11日、

原発震災6年目の記念日に大阪の天王寺でありました。福島第一原発の放射能の雲が流れた原発の北西方向に位置する飯館村の酪農家・長谷川健一さんの報告会でした。僕も原発震災の現場を見たくて2011年9月5日に飯館村の長泥に行きました。114号線を福島市から東に向かい浪江町の30km地点・立入禁止区域直前では45 μ Sv



2017年3月28日フクシマテレビより

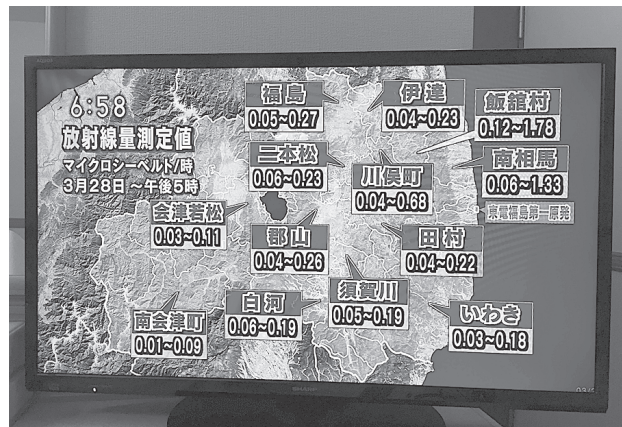
で怖くなり、Uターンしてから長泥26 μ Svを観測して引き返したのです。

現在の長泥コミュニティセンターの線量は0.38で、大分下がっていますが、福島

民報には毎日毎日福島県下の放射線量測定値が発表されています。ちなみに第一原発の前は $10.05 \mu\text{sv}$ です。人が住んでも安全と言われる年間 $1 \text{ミリ} \cdot \text{シーベルト sv}$ をガイガーカウンターの一時間線量に換算すると $0.23 \mu\text{sv}$ ですから、原発前は我慢できる線量の 43 倍、現在の長泥コミュニティセンターの線量が 0.38 は 1.6 倍です。飯館村は政府の帰還勧告を受け入れて、学校を再開しようとしているのですが、学校の周りは線量が高く $1 \mu\text{sv}$ ありましたので、大急ぎで大掃除をして 0.4 まで下げて、これなら、ぎりぎり子どもたちにも戻ってもらえるだろうと決めたのですが、学校の周りの山や野原は除染してありませんから、今は線量が 0.6 まで上がってきているそうです。

線量の高いところへ帰還して生活し子どもを産んだ人々がチェルノブイリにおられるので、長谷川さんは実情を視察に行ってこられたそうです。線量が下がったから安全で

すという政府のお墨付きを信じて戻った人々が暮らして子どもを産んだのですが、この子どもたちはみな免疫不全で病を持っています。体育の時間になると脈を図り 90 以上の子どもは体育をさせない、90 以下の子どもも走ってもすぐにダウンしてしまうそうです。飯館村に戻る子どもたちの健康を真剣に考えねばならないと思います。健康被害が発生し



2017年3月28日フクシマテレビより

た時に被ばく量をチェックできる被ばく手帳を作れと長谷川さんたち「原発被害糾弾飯館村民救済申立団」は訴えているのですが、政府側に立つ菅野村長は取り上げてくれないそうです。

村長が復興をアピールするという政府の方針に乗って行っている復興事業は、国道 399 号から少し東の県道 12 号線沿いの深谷地区を中心に行われているのですが、実に大きな計画です。近くに既に道の駅があるにも拘らず、新たな道の駅 11 億円・村民集会会館 9 億円・スポーツ公園ゾーン 52 億円（陸上競技場・野球場・プール・全天候テニスコート）で、住民の 6.5% しか戻らないのにどうする気か、信じられない無駄と長谷川さんは切り捨てていました。なぜこんな事業が出てくるのかと言えば、飯館村復興計画委員会は村民が 30% で、後は行政 30% と三菱総合研究所の所員などで 40% が占められているので、ゼネコンが儲かる計画にどうしてもなってしまう。膨大な復興予算を使うのに箱物が一番手っ取り早いからです。被ばく手帳をつくり、検査態勢を長期にわたって保証していく、などという住民目線の事業は、復興を見に見える形で成果を誇

りたい政府にとって、見向きもされない事業なのです。

復興を歌い上げたい政府にとって、目障りで仕方がないのが黒いトン袋・フレコンバックです。長谷川さんのお宅の遠景写真に畑を占領して黒い塊が右と左にデンと居座っていましたが、福島全体で2200万袋あるそうです。これを早くかたづけたいのですが、中間貯蔵施設を作るはずの双葉町と大熊町の施設用地契約が地権者が2500軒位あって契約が遅々として進まない。「先祖代々大切にしてきた土地を放射能保管場所に提供するなんてとんでもない。」という住民感情はあるし、土地の法律上の所有者は亡くなったおじいちゃん、契約するにはおじいちゃんの10人の子どもと20人の孫のハンコが必要となれば、進むのが遅いに決まっている。そこで政府は焼却施設や減容化施設をバカでかい規模で作り上げて、フレコンバックを見えなくしてしまいたい。現に保管場所は大きな白いパネルで遮蔽されて、知らない人は黒いフレコンバックの5段積みの保管所とはわからないようにしてある。パネルでなければ、緑のシートで覆い隠して、緑の畑の間にカモフラージュされておかれています。

焼却施設の問題は放射能の拡散です。放射能を完全シャットアウトできるフィルターを付けると約束していたのに操業当初に $0.5 \mu\text{s v}$ だったのが今は $1.42 \mu\text{s v}$ に上がってきているそうです。減容化施設は容積を減らすわけですが、土で放射能が8000ベクレル/10kgの土は害がないから、と土木工事に再利用されていくのです。僕の推測では、津波対策に400kmに渡り、築かれていく防潮堤の土砂に再利用されていると思います。10メートルとか15メートルとかの津波を防ぐ巨大な防潮堤にどれほど土砂がいることでしょうか、除染され、5cmも土地が削られて膨大な数のトン袋を処理して、無害と称して使える土を防波堤に使わないわけがないでしょう。

仮設住宅は3月31日期限で立ち退き、という政府方針ですが、帰還していく先は、未だに放射能に満ちているのです。堤防もそうだし、学校もそうだし、森や河川が放射能を帯びている限り、住宅地だけ除染してもやがては再汚染されていくのです。このようところで農業を再開しろと政府は奨励しています。そして、農産物保証は3年で打ち切りのようです。あとは風評被害で売れないと実証出来たら保証しよう、ということのようです。政府も東電もはやく足を洗って、原発事故はありませんでした。と言いたいのです。

このような逃げ足の速い国と東電に対し、2017年3月17日の前橋地裁の判決は「原発事故は防げた」と認定し、国と東電に賠償命令を出しました。安全神話を隠れ蓑に再び原発再稼働に突き進む政府への「もう、いい加減にしろ。」との鉄槌です。

長谷川さんの講演の締めくくりのアピールは

「これ以上被ばくさせるな!」「国と東電に責任を取らせよう!」「再稼働反対!」
「放射能ほど手に負えないものはアリマセン。」という実感こもった叫びでした。

第十留 イエス、十字架にくぎづけにされる

イエスよ、あなたは神の子。

だから十字架にくぎづけにされても、あなたは下りなかった。

そして、そのクギは今や福島の人たちのものです。

そうです、福島の多くの人々は、今までどおり普通に暮らしたい。

しかし、ヒロシマ・ナガサキ・フクシマと並べて

フクシマは悲劇の土地と言う人がいます。確かに普通ではなくなりました。

「奪ったのは誰?」と問いたくはないが、問わずにいられないのです。

それぞれの場で一人ひとりが何らかの仕方で背負って行かざるを得ないものは、誰の人生にもあります。

だが、人々からはぎ取られた土地、人が住めなくなり家だけが残された土地は、私たちに「見よ」と鋭く問いかけてきます。

一同 主よ

あなたは生まれつき目の見えない人に対する疑問、「誰の責任?」に

「神の栄光が現れるため」と答えられました。

十字架に架けられた福島の人々には、どんな神の栄光が見れるのでしょうか?

ハンセン病回復者、水俣病被害者、原水爆被害者たち、そして現代の琉球処分苦しむ沖縄の人々と共に、あなたの栄光を見させてください。

主よ、神の栄光とは、「立っている人間である」と言います。

それなら十字架の傍らに立って、目をそらさずに沈黙の声に耳を傾けることが

出来ますように。そうして、あなたは倒れていた世界を福島の命の叫びによって、新しい命に生き返らせて下さい。

—十字架の道行き—原発震災をイエスと共に歩む (手作り暫定版)



署名のお願い

長崎の爆心地から12キロ以内で原爆にあいながら、国が指定した被爆地域の外にいたため「被爆者」と認められない「被爆体験者」の方たちが訴訟を起こしています。公正な判決のための署名をお願い致します。

「石川一雄さんは無実です。私はキリスト者だから、愛をもって訴えたいところだが、狭山事件に関しては怒りをもって訴えざるを得ない。私たちはもうこれ以上待てません。再審開始を求めます。」

高裁前アピール行動隊 ノジマミカ

東京高等裁判所の門前で、支援者のマイクアピールが響き渡る。これは日本基督教団の丹波二三夫さんのアピールだ。宗教者の集いやデモを企画実行してくれた、狭山には欠かせないキリスト者。今年最初の高裁前アピールがあった1月19日、向かう途中の電車内で脳梗塞で倒れて今も病床にある。お見舞いに行ったが意識も戻らない状態で、祈りの日々が続く。

狭山事件の再審は石川一雄さん、お連れ合いの早智子さんだけではなく、長く闘ってきた仲間の悲願でもある。

私は8年前に母を医療過誤で亡くし、裁判を起こした。2012年2月終わり、忘れもしない初公判の日だった。はじめて行く裁判所、地下鉄の階段を上がるとビラを渡された。横断幕の文字が目に入る。『石川一雄さんは無実です 冤罪 狭山事件の再審を求めます』（冤罪？足利事件みたいな事が他にもあるの？狭山事件？知らないなあ。聞いたこともない。）マイクで誰かが訴えているが、自身の裁判のことで気持ちに余裕がなく、足早に通り過ぎてしまった。

しばらく経ってから思い出し、受け取ったビラを見てみた。そこには、にわかには信じがたい事がたくさん書いてあった。部落差別って何？と思ったが、何より文字が読めない人がいたことに愕然とした。識字率99%を誇るこの国に住んでいて、残り1%の人に心を寄せること自体がなかったのだ。しかも49年も昔の事件で（2012年時点で）、未だに声をあげている人がいる。ハンマーで殴られたような衝撃だった。

生来の探究心と正義感に火がついた私は、すぐに情報収集をして5月のフィールドワークに参加した。それまでに狭山事件の本を2冊読んで、無実ということは頭では理解していた。現地に行って無実を確信したのはもちろんだが、それ以上に石川一雄さん、早智子さんの優しく、屈託のない人がらに魅了された。何か行動しなくては、という思いが日に日に募り、思い立ってはじめてのがインターネットを使った情報発信だった。社会的な活動の経験ゼロ、人脈なし、人見知りで友達も少なく根暗な私には、この方法しかなかったのだ。

何の知識も展望もない、今から考えれば無謀なスタートだった。しかしイメージはあった。今、運動はリアルタイムで情報を発信し、自然発生的に、しかし目的をもって人が集まる時代だ。アラブの春や反原発運動がそうだった。手探りではじめて狭山だが、最初の答えは数ヵ月後に待っていた。

高裁前アピール、ここを活動の軸にしようと思った。

狭山事件は2度の再審請求も、審理どころか話し合いの場すら設けられずにあっさり切り捨てられた。第3次再審請求で2009年に流れが変わった。当時の門野博裁判長が裁判所、検察、弁護団による三者協議を初めて開き、検察に8項目の証拠開示勧告を出したのだ。そして翌年、実に47年ぶりに逮捕当日に石川さんが書かされた上申書が開



高裁前でアピールする石川早智子さん

示され、再審開始に一筋の希望の光が差した。以降現在に至るまで三者協議が継続して開かれ、弁護団と検察との攻防が続いている。

驚いたことに、石川一雄さんは当事者でありながら三者協議には参加できないのだ。そこでご本人の再審への思いや、声を司法に届けようということで始まったのが、高裁前アピールである。三者協議の日程に合わせて取り組まれている。石川さん、早智子さんはもちろん、支援者がたくさん集まって、狭山事件の再審が市民に支持されていることをアピールすることが重要だ。

石川一雄さんは被差別部落に生まれたために、小さいころから家の手伝いや子守り奉公に出されて、学校にも満足に行けなかった。それは単に読み書きが出来ないとどまらず、非識字者であるがゆえに社会に対してあまりに無知だった。権力はそこに目をつけて、手練手管で石川さんを罪に陥れたのだ。しかし忘れてはいけないのは「部落ならやりかねない」とむき出しの差別を煽ったマスコミと、それに乗った市民がいたということだ。

1審死刑判決の後、三鷹事件の竹内景助さんの助言や兄の六造さんにアリバイがあることがわかり、ようやく警察・検察による心の呪縛から逃れた。真相を知った時は本当に悔しかったと思うし、自分の運命を呪ったことだろう。それだけではすまない。このままでは確実に死刑台に送られてしまうという怖さは、とてもじゃないが安全地帯にいる私などは想像もつかない。

この後石川さんは覚醒し、猛然と文字を学びはじめる。ここに無実を信じて、石川さんに文字を教えた刑務官の真摯な姿があった。そして獄中から火を吐くようなメッセージを送り続けた。一方獄外では国が行った様々な差別政策に、心底怒りを感じた人たちが声をあげ始め、闘いが拡大していった。狭山差別裁判闘争とは石川一雄さんが、部落差別ゆえの無知から、学び、成長する過程そのものである。同時にそれに共鳴し、

我が身のこととして学んだ人たちの成長の過程でもある。学びの勝利であり、私が狭山に惹かれ続ける理由がここにある。

私はといえば、狭山に関わり、高裁前アピールに参加するようになって、たくさんの仲間ができた。石川さんと同じように被差別部落出身の方、幼いころ広島で被爆された方、沖縄、後にはハンセン病元患者やアイヌの方とも繋がるようになった。その人それぞれの、石川一雄さんと同じように、筆舌尽くせぬ過酷な背景があるのだと、胸が熱くなった。私は日本は差別が無くていい国だと思っていたので（今から考えたら本当に世間知らずも甚だしい認識だった）こんなに差別される人たちがいるのだと驚かされた。

そして映画『SAYAMA みえない手錠をはずすまで』の金監督と出会い、上映運動を始めた時、初めて自分も差別者なのだと気がついた。幼少のころから知らずに刷り込まれ続けていた在日を含めた朝鮮の人に対する蔑みは、それが差別と知らないままに、時に韓国や中国で反日の機運が高まったところ増幅されていった。金監督と上映運動を通じ



高裁前アピール行動隊のメンバーと石川さん夫妻

て心を通わせていくうちに、気持ちがほぐされ差別する事から解放されていく実感は言いようの無い幸福感だった。そして今までの差別していた自分を心底恥じた。

社会運動の経験ゼロと書いたが、思い起こせば3.11の大震災後の福島原発事故で、次々と明らかになる国と東電の無責任

体質に心底怒りが湧いてデモ情報なども調べていた。しかし運動特有の排他的な雰囲気を感じて、結局参加することは無かった。

今から思えば運動の入り口が狭山で本当によかったと思う。

それは「自分は差別者である」という、運動にとって、もっとも重要なことを認識せざるを得ないからだ。被害者になりたくないから運動するのと、加害者になりたくないから運動するのでは、やることは同じでも、意識の上で天と地ほどの差が出るものだ。

多くの差別は、国の差別的な政策から始まる。部落も、在日も、ハンセン病も、アイヌも、そして沖縄も・・・例外なく国が先導して差別したのだ。しかし、それを推し進め、直接/間接的に差別したのは他ならぬ市民、つまり私たちであること。「障害者が不幸なのではない、障害者差別が不幸なのだ」という言葉を重く受け止めなくてはいけない。

こう見ていくと、狭山にかかわり続けて差別を知り、歴史を学び、現在に至るまで、

私自身の成長の過程でもあったと思う。だからこそ、多くのまだ見ぬ仲間と繋がりたい、同じように狭山を通していろいろなことを感じてほしいと思っている。

それにはどうしたらいいのか、言うまでもなく裁判闘争は重要であることに変わりはない。しかし、それ以上の何か、狭山の持つ豊かさとか暖かさとか、「熱と光」をもっと伝えなければと思っている。

私が作成しているフェイスブック『狭山事件の再審を実現しよう』というHPでは、いろいろな取り組みや三者協議の事なども書くが、高裁前アピールのことがメインとなっている。

何といっても高裁前アピールは楽しいのだ。本来なら「充実している」とか「貴重な取り組み」とか表現すべきなのだろうが、やはり「楽しい」方がより近いのだから仕方がない。「9時までしかいられないけど」といって仕事前に手作りケーキの差し入れを持ってきてくれる人、義姉のウメ子さんが来るときは、休み時間にこれまた自家製のおこわや惣菜などで、おしゃべりに花が咲く。もちろん食べものネタばかりではない。

20年、30年前の石川さんが獄中から宛てた手紙を、宝物のように持ってきて見せてくれる人もいる。他の運動体のアピールに来ていた人が「学生時代に日比谷公園に通った日々から40年以上、いつまで石川さんを待たせるのか?!」と思いがけず共闘アピールを下さる方などと出会えるのが楽しみだ。『獄友』の連帯アピールはやはり目を惹く。

多くの宗教者の皆さんも来て、様々にアピールをする。冒頭にも書いたが、これはすごいことだと思う。宗教も宗派も超えて、共に闘うのだから。また教職者も多い。日の丸・君が代裁判を闘う人と出会い、今まで何も考えずにいた天皇制について、初めて考える機会を持てた。

そして石川一雄さん、早智子さんの心に響くアピールは、いつも私たちを差別や権力の横暴に対して奮い立たせてくれる。

こうして振り返ってみると、ここが多くの出会いや気づきの場になっていることに気がつく。

ほとんど勢いではじめた狭山の取りくみも、あっという間に4年経った。始めた当初から「若い世代」とか「新しい感覚」とか言われて、何とかここまでやってきたが、もうそろそろ真価を問われる時期に来ている。多少の粗さにはご愛嬌で済ませてしまったが、きっと苦言も数多くあったであろう。それでも辛抱強く見守り続け、私の好きなようにやらせていただけたことに感謝の言葉は尽きない。

狭山第3次再審請求審も無実の新証拠が出され、いよいよ大詰めを迎えている。

この第3次で勝利すると共に、狭山の闘いの「熱と光」を多くの人に伝えたい、それは希望であり続けると信じている。

次の高裁前アピールは以下の日程です。

4月13日(木)、4月20日(木)、4月27日(木)

朝の部 8:30～10:00

昼の部 11:50～13:00

東京高等裁判所の場所は地下鉄「霞ヶ関駅」A1出口を出てすぐ
第32回三者協議は5月上旬です。

Facebook『狭山事件の再審を実現しよう』に掲載します。

<http://www.facebook.com/sayamajiken>

映画のお知らせ



■映画の概要
ドキュメンタリー／100分
撮影期間 2010年～2017年8月
完成予定 2017年10月

スタッフ 監督 金聖雄
撮影 池田俊巳 渡辺勝重
音楽 谷川賢作 録音 吉田茂一
プロデューサー 陣内直行

製作 キムーンフィルム



金聖雄監督
「SAYAMA みえない手錠をはずすまで」
「袴田巖 夢の間の世の中」に次ぐ
シリーズ第3弾! 冤罪青春グラフィティ!
遂に始動!
2017年秋公開予定!
映画 獄友 ごとくとも
人生のほとんどを獄中で過ごした、
“殺人犯”と呼ばれた男たちがいる。
彼らは言う「“不運”だったけど、
“不幸”ではない、我が人生に悔いなし」と。
千葉刑務所
Kimoon Film

映画作りにご支援を!

info@gokutomo-movie.com から見る事ができます。

「部落関係者」の一人として

広島県内カトリック学校勤務 西川正博

大阪と私の住む広島県とはさほどに遠隔の地ではない。しかし、紛れもなく広島をはるかに凌駕する大都会である。常にそのエネルギーに圧倒される。どこを歩いても飽きることがない。観光地・観光資源にもあふれている。更に、いつも天候が良く、のどかな気分にさえなる。ところが、2017年1月8日の大阪は荒れ模様の天気だった。「サクラファミリアー」におうかがいする前、午前中に中之島にある「国立国際美術館」にて「ヴェネツィア・ルネサンスの巨匠たち」展を鑑賞し、道中、強風で折り畳み傘の骨の金具がねじ曲がった。雨にも打たれた。記憶にないほど寒い思いをした大阪だった。大阪の情勢もまた政治絡みで厳しいのか。「リバティおおさか」の置かれている現状を案ずる時、この地の風も逆風であり、冷たく厳しいことを思わざるを得なかった。

瀟洒で心落ち着く教会である「サクラファミリアー」は、その折、申し上げたように、確か三度目の来訪である。交通至便で、賑やかな都心部の一角に品性あるたたずまいを見せて開かれている。いつもそのように思わせてくれる。このたびも、山本純子さんのお話を聴く期待と共に、この教会を訪れること自体も楽しみとしていた。

この「第9回対話集会」のしばらく後に、部落差別人権活動センターからお手紙を戴いた。この「感想文」依頼のご書状である。率直に申して、当惑した。集会中、申し上げた通り、私はカトリック信者ではない。聖書を集中的に学習した体験もない。人権問題にかかわりを持ち、広島県やその周辺地域で研修や集会に参加もし、それを細々と目前の教え子たちに伝えてはいるが、自身はそんな自分を「金魚のフン」と自認しており、自ら活動を興すこともできず、まわりの知人・友人や先輩たちを手伝っている程度の人間だ。また、前述のごとく、大阪の地の者でもなく、山本さんが活動なさっている滋賀県にもとんと縁がない。こんな人間の駄文が何か意味を持つのか。

実は、お手紙に至誠を感じ、ついお断りすることができなかったというのが本音である。また自分は国語科の教員でもある。日頃、生徒たちに折々に「感想」を求めており、生徒が怠けたり未提出であったりすると注意や指導をする。生徒は、私による「感想」の請求を基本的には断ることはできない。ならば、ここでお断りするなど、教職員としての面子にもかかわるではないか。

一方、いわゆる「感想」は既に「対話集会」の際に述べている。また、私の感想や感慨以上に、山本さんご自身や参会者の皆様のお言葉の方がより力強く、より重く、より豊かな示唆に富んでいた。繰り返す、この駄文がいかような意味を持つか。

したがって、以下、叙述することは、「集会」の内容からはいささか離れる。申し訳ないが、そうする方がまだ書き記す意味があるような気がする。

「部落関係者」——この言葉が「集会」のキーワードであった。山本さんは被差別部落出身者ではない。お連れ合いが部落のご出身であるが、山本さんのお母様はむしろ愛娘に対して結婚差別をしてしまった人であった。また、集会に参加した皆様も、部落問題に関してさまざまなかかわりを持っていらっしゃる人であり、その意味では、全員が「部落関係者」であることは認識した通りだ。

それでは、この日本社会の中で「部落関係者」ではない人がいるのだろうか。……いない……。本当に残念だが、部落差別という社会問題が、現在も残っていることを明記した法令が、昨年11月に可決されたことを見てもわかる通り、社会現実の上でも、いかに理念法とはいえ法令の上でも、部落差別は現在も社会の宿痾であることは明瞭な事実だ。その空間の中で暮らしている私たちは、一人残らず、「部落関係者」といえる。私は被差別部落出身者ではない。しかし、と称すべきか、だから、と称すべきか、私の親はやはり差別とは無関係ではなかった。お恥ずかしい限りだが、被差別部落に対して偏見を持っていた人たちである。

れっきとした「部落関係者」になったのは、高校1年生の折の学校での同和教育だった。ある、著名とされる同和教育の実践者の書籍を読まされ、それでも「同和」という言葉の意味もわきまえず、その実践者が来校して講演するというので、友人たちといい加減なおしゃべりをしながら講堂に入場し、その中年男性の話を聴いた。彼は、自身の部落問題に対する果敢な闘争の日々を誇らしげに語り続け、その熱のある語り口にいつしか私たちは魅せられていた。彼はこのように語ったと記憶している。

「私は、『差別は許してはならない。』と繰り返す人に尋ねました。『なぜ、差別はいけないのですか？』——彼は気色ばんで言い返してきました。『いけないに決まっているじゃないですか！』『だから、なぜ、いけないんですか？』——彼は沈黙して答えませんでした。皆さん、どうして差別はいけないんでしょうか？」

この講演者は、私たちに尋ねてきた。私も、その時、なぜ、いけないのか……という問いにとらわれていた。なぜ、いけないのか。

「差別は、人を殺すのです！」

彼は格調高く断言した。その通りである。私は感動した。しかし、帰宅して、両親にそのことを告げた際、両親の中に巢食っている偏見を知った。

他方、1991年10月に、広島で生起した「中学校教師結婚差別事件」の後、私に感銘を与えたこの講演者は微妙な変節を始めた。この事件が影響したのかどうかはわからないが、90年代後半あたりから、この講演者は積極的に「同和問題は終わった。」とその著述などで強調し始めた。ここまで記すと、多くの人にはこの人物が誰か思い当たるのではないか。後年、広島市の公文書館で、高校1年の折に聴いた講演者の名前を確かめた。恐らくは間違いないと判断している。しかし、確認が誤まっている可能性もあるので、ここでは名前は明記しない。ただ、この人物によって、同和問題に対して蒙を啓

かれ、親の差別感覚も悟り、この人物に失望感も与えられ、それでも、自身が「部落関係者」であることを否応なしに自覚し続け、「部落関係者」としてささやかに人権問題にかかわり続けているというのが、私の道程である。

それにしても、私の高校時代における同和教育は、今、自分たちが教育現場で細々と取り組んでいる人権教育と比して、随分と乱暴なものであったと改めて痛感する。前記のように、「同和問題」に関する説明はなかった。講演者の書いた書物を一斉に読まされただけである。事後の感想を記した記憶もない。要は、事前学習として読書をし、その著者の講演を聞いて「終わり！」だったのである。

(勿論、子細に記憶していないだけかもしれないが。)

かつては、これでよかったのかもしれない。私がそうであったように、保護者もまた被差別部落への偏見を持ち、私の親のようにそれはいけないことだと自覚しながらも、「もしも、おまえのお嫁さんがそう(=被差別部落出身者)であったら、考えてしまうなあ……。」とためらいがちに語った父の姿が象徴するように……。この状況を打破するためには、ある種の「突破力」のようなものを持った講演者に「出会う」ことが不可欠だったのかもしれない。しかし、現在、目の前の生徒たちは部落差別問題に関してまるで無知である。保護者も子どもたちに部落差別を伝えてはいない。また少数ながら伝えている保護者はいるにしても、それはやはり「正しい」(?) 教え方であり、部落差別を助長するものではない。そうした生徒は、差別すること自体が卑しいことだと何とはなしに理解している。ただ、念押しするが、そうした生徒たちは少数派である。

大半の生徒は保護者からも伝えられてはいない。知らないから、偏見さえ持ちようがない。そして、部落差別問題や人権問題を最初に扱う段階で、反射的に「寝た子は起こさない方がよかった」! ——となる。例えば、このように。

「差別はよくないと思うし、今回の話を聞いて、伝えることも必要なのはわかったけれど、やっぱりこうして授業で学んでいるのが差別を長引かせている一つの原因だと思う。学校で差別の理由を教えてしまうと、それが良いようにとれる人も悪いようにとれる人もいる以上、悪いケースを考えて教えない方が差別はなくなるのではないかと思う。」(部落差別問題に関して知った高校2年生女子の感想の一節)

——「差別の理由」を教えたことはないが、この生徒はこのように受けとめている。こうした生徒たちに、いかに向き合い、部落差別の克服への展望に一步進んでもらえるか。私たちの歩みもまた道半ばである。

新しい法令も成立した。他方、ネット社会の中では「ヘイトスピーチ」や復刻された「全国部落調査」が蠢き、そのバーチャルな非人間的な感覚は現実の中に這い出している。幸淑玉さんは、「ヘイトスピーチ」を「レクリエーション化した差別」と称した。現実と乖離した、すなわち一人一人の人間とのかかわりを決定的に欠落させた、この差別感覚に拮抗する主体の確立は、今後、ますます大きな課題となってくることだろう。

このあたりで、ノルマの字数は満たしたような気がしている。叙述前に予感したように、やはり内容空疎な駄文となった。申し訳ない限りだ。しかし、これで、部落差別人権活動センターは二度と私に原稿依頼などなさないだろう。しかし、改めてお会いできることを楽しみにしています。読みづらいものに付き合っ下さり、感謝申し上げます。

第9回対話集会

山本純子さんの自己紹介：

こんにちは山本純子です。私は野洲という所に生まれて、育って、今もそこに住んで野洲しか知らない人間です。両親は小学校の教師をしていました。姉と兄がいて私は3番目の末っ子で、甘えん坊のままルンルンと過ごしてきたので、部落差別についてもあまり知らないまま育ちました。今は同じ野洲の中にある被差別部落の人と結婚して、そこに住んでいます。子どもは男の子ばかり3人いて、上は27歳になって一番下の子ども明日成人式を迎えます。子育ては本当におばあちゃんにお願いしているところがあって、子どもたちも、「俺たちお母さんに育ててもらってない、おばあちゃんに育ててもらった」って言っています。「そう思ってるなら、おばあちゃんを大事に下さい」と言っているんです。仕事はもう30何年、地元のいろいろな保育所に勤めています。



山村さん 滋賀県の野洲市がどこなのか分からない人もあるかと思うのですが。

山本さん JRで行くと野洲止めの列車があるのですが、琵琶湖の南部にあたります。

山村さん その被差別部落に住んでいるんですね。

山本さん そうです、小さな部落で130戸ほどのところですよ。

山村さん 子どもは多いですか？

山本さん 少ないですね、今は。

山村さん 駅のすぐ近くなので、混住化が進んでいるのでしょうか？

山本さん そうですね、進んでいますね。駅の近くなので、便利なこともあるんです。

山村さん 先ほど、被差別部落の人と結婚して部落に住んでいるという話を下さったんですが、今日はそのことを話して頂きたいと思います。去年、今年は人権に関

わる者にとっては非常に渋い年になっていると思うんですね。なんとというか、排外的な価値観とかもたくさん出てきて、健全な批判とかを段々忘れていくような状況の中で、皆さん貴重な時間を使ってここに来てくださっています。

皆さんに話して頂きたいことは①人権に関心持つようになった理由とかきっかけ。②対話集会に期待すること。こういう学びをしたいというようなことがあれば教えて頂きたいな～と思います。

山村さん 地区出身ではないし、野洲市氏の地区外でずっと育って、結婚前からどういう仕方で同和教育とか、被差別部落とか部落差別に出会ったか、どういう教育を受けて来たか、興味関心はどうだか、ということをお話して頂きたいと思います。

山本さん 野洲の真ん中あたりにある JR の駅から、道が二つに分かれていて、片側に実家があって、今は反対側に住んでいます。小さい時は野洲駅までは行くけれど、今住んでいる被差別部落の方には行ったことがなかったんです。歩いて 10 分くらいほんまに近い距離なんだけど足を踏み入れたことがなかったんです。同和教育が始まったか始まってないくらいの年代なんですけど、中学生くらいの時に啓発映画を観たことを思い出します。「雑草の歌」という昔の映画の一場面だけ覚えているんです。バキュームカーで仕事をしている人がいて、小さい子どもを連れてお母さんが「しっかり勉強せなんだら、大きゅうなって、あんたもあんな仕事をせなあかんで」みたいな差別発言する場面なんです。啓発映画の意味が今ひとつ分かっていなかったと思いました。啓発映画を観て、感想文を書いて、ハイ終わり！というような教育だったと思うんです。大学に行った時、特別講座があって、被差別部落のこと石川さんのこと、狭山事件のことを知りました。でも、その時に思ったのは、過去にあった事件を何で勉強するのか分からなくて、石川さんというかわいそうな人がいた、そういう受け止めしかできていなかったんですね。その事件のことが今も続いているということも部落問題についても、何にも分かっていなかったんです。そんな私が就職をして保育士としての最初の勤め先が同和保育所だったんです。野洲市で初めて建った同和保育所で野洲市自体も同和保育所ってどんなことをするのか、何をするのか、みたいな感じで 4 月 1 日に行った時には職員室にまだ机がなくて、机運びから始めるというような新しい保育園でした。

先ず職員が同和研修をしなければということで、「同対審答申」の学習会をしたり「同和保育」ってどんな保育なのか！啓発映画で部落差別ってどういうことなのか！勤めたその年は本当に研修が多くて、子どもたちを保護者さんたちに返した後から研修が始まるので、すごく遅い時間まで 8 時とかは早い方で、9 時 10 時まで会議があつたり、本当に遅い時は 12 時くらいまであつて、研修や会議をいっぱい、いっぱい受けました。

そうしながら、やっとなあ、ああ、こういうことなのかなという風に部落差別を研修の

中で教えてもらいました。けれど私が本当に部落差別に気づかされたのは、保育園の先生と、子どもを預けている地域、被差別部落のお母さんたちとの懇談会。その中で「先生はほんまに部落差別のことが分かってんのんか！」みたいに言われて、「私らは部落差別のことでずっとしんどい思いをしてきたんや！」とか、「だからこそ子どもには、こんなしんどい思いをさせたくないと思っているんやで！」「先生たちは結婚する時に相手の人が部落の人やったらどうする！」みたいなことをボンとつきつけられて、もう私、正直、何が何だか分からないような状況で、他の先生たちが応えてくれている中で、私は何も言えずに、今、この場面は何が起きているのか、みたいな感じで見えていました。

お母さんたちのすごい思いがバンバンぶつかって来て、それで初めて、ハッと思って、部落差別というのは、昔のこととっていたけど、違うんだ！今、ここに、あるものなんだ！このお母さんたちは差別を受けてしんどい思いをして来たんだ、ここで、今、生きている人間の問題なんだ！今から30数年前なんですけど、その場面は忘れられません。気づかされて回りを見た時に部落差別だけやないんや、在日の問題も障がい者問題も男女差別の問題もあると世の中にいろいろな差別があることに気づかされたんです。「私は差別なんてしてへん！」とっていたけれども、知らないがゆえに、気づいていないがゆえに、相手を傷つけて差別をしていたこともいっぱいあるんじゃないか！知らないことは凄く怖いことだと思いました。気づきは二十歳の時、働き始めて一年目、お母さんたちとの懇談会の衝撃的な出会いが変わるきっかけを与えてくれました。

山村さん 客観性は大事なんですよ。差別があった時に、それを感情的に走らずに客観的に見るのは大事なんですけど、でもそこで心が血を流すというか、傷つく気持ちの部分が出てくる、その生の声に触れることで客観性という事実が立体的になってくるので、両方、知識と現場の声に触れるというのは大事なことです。人権教育というか、差別問題を理解しようと思ったら両輪で行くことが大切なのかなと、今の話を聞いて伝わってくると思います。「同対審答申」というのは1965年に「同和对策審議会答申」が出されて、この答申が今の人権の施策と言いますか、人権のいろいろな制度とか教育上の政策の基になっています。これがあって1969年に「同和对策特別措置法」ができて部落差別の住環境とか教育面でのいろんな整備が始まって、その後「地域改善事業特別措置法」が1982年まで伸びるんです。地区の人たちがそれまで職業面でも学校の教育面でも、住んいでるところも“差別されて当たり前”というような価値観もはびこっていましたし、そういうものを解決するための、全ての基礎になっているのがこの答申です。

山本さん 勤めたところが野洲の被差別部落の中にある同和保育所で、相手の男性は隣保館、地域総合センターに勤めていました。地域総合センターと同和保育所なので

連携を図ってやって行くので、顔見知りにはなりました。でも付き合うようになった直接的なきっかけは先輩の保育士さんと相手の地域総合センターの上司とが夫婦で“あいつらくっつけようか〜”と、そういうことで知り合ったんです。付き合う前に、好きとか好きでないとか関係なく、付き合うか、付き合わないかということ考えた時に、最初の迷いがあって、相手が被差別部落の人ということは知っているし、この人と付き合っただけで気が合わないで別れたら、それって部落差別になるのかな〜とか、付き合っただけで結婚して子どもができた時、私の子どもは部落の子になるのかな〜、今私が違う人と結婚したら私の子は部落の子じゃないとか、付き合う前やのにそんなことを考えたんですね。その時はよく分からなくなって、「まあ〜いいや！」そんなこと深く考える前に、とにかく付き合ってみよう、というところから始まったのです。付き合う前にそういうことを考えたのは、私自身が部落差別問題も、差別心ということも、よく分かっていなかったからだと思います。

結婚しようとなった時に、ちょうど私の兄も結婚を考えていて、「結婚しようと思うてん」と両親に言った、それに乗じて「私も！」って言ったんです。「お前はちょっと待て、お兄ちゃんの年考えてみ〜、お兄ちゃんが先」って言われて、兄が先に結婚して、私も結婚のこと考えているって話をした時に、すごく深刻な感じになったんです。やっぱり相手が被差別部落の人だからです。私は両親が小学校の教師だし、差別問題についても勉強しているし、反対されるとは思っていませんでした。「ちょっと待て！」に「なんで！」って思ったのです。小学校で同和主任もしていたし同和教育もやってきている人間だから分かってはいるとは思っていたんですけど、両親が教師になった頃には同和教育も無かったし、両親自身も同和教育を受けてなかった時代です。「同和教育をきなさい」ということで、同和教育を受けてない人間が同和教育をしていくわけです。手探り状態やったと思うんです。だから全てが分からない中で母親がまず反対したんです。でも絶対「反対！」という風には言いません。それが差別ということは分かっているし、それを前面に出すのは「ダメ！」ということも分かっているんです。でも気持ち的に反対で、私が付き合っていた時も、付き合わないようにと母なりに考えていたようです。その時には退職していたんですけど、ある日、私が仕事を終わって帰って来ると母親がいないんですね。いつもだったら、夕飯の準備をしているのにいない。精神的に落ち込んでいて、自分の実家に行って、自分の兄に相談を持ちかけていたんです。母は車の免許を持っていませんから、どうやって行ったんだろうと思うぐらい、すごい時間をかけて歩いてそこまで行っているんです。

何日も寝込んで家事がおろそかになってしまったのです。母親は仕事をやりながら家のことも、子育てもして来てくれたすごい人だったのに、それができなくなったり、寝込んだり、フツとこういう風になくなったりとかいうことがあって、母親

が悩んでいた、落ち込んだり、精神的に不安定になっているのを見てきました。私に対する言葉も乱暴になり、末っ子で甘えん坊で育ってきたから、そんな母親の姿を見るのがすごくショックで、母をこんなふうにしてしまって悩ませているのは、私のせいや！私が悪いのになって、私自身もそれですごく落ち込みました。



どうしたらいいのか、何にも分からなかったし、何にも考えられなかった。そういう時期がずっと続きました。彼と出会う度に、「どうや？お母さんはどうなん？」と聞かれるけど、そのことには触れたくなくて、すごく反対されていたとか、彼には言いたくなくて「まあ～ええやん」みたいな感じで避けていたところがあります。でもそれだと話が進んで行かないし、どうしようと、いろんな方に間に入って頂いたりしたんです。父親は「反対！」という風には出なかったんですが、母親がそんな状況なので、大っぴらに「賛成！」ってことも言えなかったんです。父は反対はしなかったけれども、賛成だから、お前は頑張って結婚したらいいみたいなこともなかったのです。姉は結婚して家を出ていたので、兄が間に入って、いろんな形で母親を説得してくれました。私もその話に出ると言ったら、「お前はちょっと向こうへ、あっちの部屋へ行っとけ、俺が話したるから」。

別室に居ながら、お父さん、お母さん、お兄ちゃんが、今どんな話をしているのだろうかと思っていました。何回も、ちょっと間を置きながら話をして行ってくれました。その時期が一番しんどかったかな～、なんで！分かってくれないのか。教師をしていたのにどうして！同和教育を学校でやって来ていたのにどうして！どうしてお父さんは何も言わへんの！って思っていたんです。でも私も自分が悪いと思っているから、自分自身で母親を説得したり、父親と話をすることもできなかったんです。とにかく結婚の話は避けたくて、結構長い時間、母親も落ち込むし、私も落ち込んで悶々とした時期がありました。人に間に入ってもらったり、兄も説得してくれたり、やっと認めてもらえて結婚することになったんです。その時も母は反対の気持ちは残っていたと思うんです。それでも、嫁入り道具はそろえてやらないと思って、筆筒を買いに行つて揃えてくれたり、私が知らん間に着物を用意してくれたり、その着物にも、どういう時に着るもの、これは訪問着で、これはこうい

う時にと、着物一つ一つにメモして、付けていてくれました。娘が結婚する時にはちゃんと揃えてあげないと思っていたんでしょうね。反対されて結婚式にも出てもらえないこととか、なかなか認めてもらえないことがあるじゃないですか。でも私は幸せなことに認めてもらえたとし、結婚式にも出てもらえました。その結婚式の前なんですけど、何かで親戚がうちに集まる機会があった時に父が「純子が結婚することになって、相手の人は被差別部落の人なんや」という話をしたんです。親戚もびつくりはしたみたいだけでも、「まあ、当人がよかったら…」っていう感じで、そこでも露骨な反対はなかったんです。ただ私に疑問だったのは、お兄ちゃんやお姉ちゃんの結婚の時に親戚にこんな話した？たまたま親戚が集まったからかもしれないけど、結婚式に出てみたいな話はするけど、相手の人がどういう人でとか、どこの人でとか、そんな話はしないのに、相手の人が被差別部落の人だったら、こんな話するんか！と、そこはちょっとひっかかっていたところですよ。

結婚式の前の晩に、母がここで読んでと手紙をくれて、“読んでら返して”って言うんですね。その手紙の中には「結婚したら、もう私の娘とは思わない、だからもう実家には帰ってくるな」と書いてありました。すごいショックで、明日結婚式という前の晩に「もう娘は死んだと思うから、もう帰ってくるな」みたいな手紙を私に見せるか！と思ったんです。それはいけないことと思っているから手紙を娘に渡したっきりじゃなくて「返して！」って言ったんです。それを自分の言葉では言えなかったんでしょうね。母親に何にも言えなかった、ただ読んで素直に返しました。その手紙のことは、兄にも父親にもず〜って言ってなかったし、もちろん彼にも言わなかったし、ず〜と自分の中にだけ納めといて…読んだけど『私、これ！なかったことにしよ！』って決めたんです。「帰ってくるな！」って言われていたけど結婚式あげて、旅行のおみやげを持って、知らなかったふりをして、実家にも帰りました。一カ月ほどして母が自転車で転んで足を怪我した時も見に行っても二人きりになると「何で帰って来た！早よ帰りい！」って言われたんです。嫁ぎ先と実家はほんとに近くて、歩いて帰れる距離なんです。それでも、そのことがあったから、なかなか帰れなかったんです。きっかけがあると帰るけれども、言われたことが、がーんと来るし、でも兄とか父親はそのことを知らないのだから、別に何にも思っていないけど、だから母も二人になった時に、そういうことを言うという感じでした。

山村さん 結婚ってね、一般的には幸せな感じで結婚するはずですよ。でも嫁入り道具とか全部揃えてくれて、そういうことをしてあげたいという気持ちがありながら、娘を死んだものと言わせてしまうような、それだけ強い差別がある。昔のことだと今も言う人がいると思うんですけど、被差別部落の人や、在日の人もそうですし、マイノリティ出身の人が結婚する時に、自分の出自がどうかということを親が真っ先に気にするんです。うちの妹が結婚する時も、相手は地区外の人だったんですけど

ど、付き合っている時とか結婚の時に、父親が妹に確認したのは「出身の家やと知っとるのか」それを確認するんです。でもそれって普通の状態やないなあって、傍で聞いていて思っているんですけど、そういう問題は何十年も前やって言われたけど、去年、2016年でもあまり変わってないですよ。知らなかったら、昔の問題と思うけど、今ここで起こっていることというのは、全然変わってないなあと聞きながら思いましたね。当事者でないけれど、部落問題や人権関係の勉強をいっぱいしていたけれど、いざその場面になったら、出身がどうのというのでなくて、差別を受ける立場になってしまった時に、自分が悪いと自分を責めてしまうというのは、どの人でも一緒に、状況がそこまで追いつめてしまう、そんな状況を容認していたらあかんのではということが、よく分かるお話なんですけど、とても重たいです。話してくれたことは、今まで全然話し話したこともないし、家族も知らなかったし、母親と兄がずっと話し合っていたということも、間にずっと入ってくれていたということも後になって知った、ということ。言うってことはそれだけ時間が要ることなんですよね。傷ついていることなのかなあって思います。今、話してくれたことで、この辺りをもう少し聞きたい、もしくは感想言って頂きたいと思うのですがけど、今聞いた話の中で、自分が生きてきた琴線に触れるというか、思い出したくない場面というのは、無理に言わなくてもいいと思います。パスしたいとか、胸がいっぱいなので言いたくないとか言ってくださって結構です。

山本さん 母のことでもうちょっと話させてもらえたらなあ。結婚して半年ほどして妊娠が分かって、母に電話したんです。「赤ちゃんできたんねえ」って。電話したら、母はしばらく黙っていて、次に言った言葉が「頼らんといてな」だったんです。こっちとしては、「赤ちゃんできたんねえ」と言ったら「あゝそうねおめでとう」っていう言葉を期待しますよね。私もその後言葉が出なくて、何がそう言わせてしまったのかなって思いながら、電話を切ってしまったんです。産んだら、実家を頼るじゃないですか、実家に戻って、産後の養生させてもらうじゃないですか、でも母親の「頼らんといてな」の言葉があったから、すごく迷ったんです。「どうしよう！」って。

帰っていいのかどうなのか、兄に「生れたらどうしよう？」って言ったんです。兄に母の言葉は伝えてないし、「エッ？何言うてんや、帰ってこいや！生まれたらしばらく帰って来たらええやんか」みたいに、兄は母の言葉を知らないから気軽にそう言うし、迷って、またここで『聞かなかったことにしよう！』って開き直ったんです。産後帰ろう！実家に甘えさせてもらおう！産んだ病院も実家と嫁ぎ先の間位、歩いて行けるくらい近いところなんです。産んで、父親はすぐに赤ちゃんの顔を見に来てくれたけど、母は来ませんでしたね。だけど、もう甘えようと決めたし、赤ちゃん連れて実家に帰ってしばらく世話になることにしました。母に「生れ

てん」とグッと押し付ける感じで赤ちゃんを抱っこしてもらいました。母はやっぱり、しっかり面倒見てくれましたし、赤ちゃんの産湯やら全部やってくれました。し、その時兄にも子供が生まれていたし、まだ小ちゃい兄の子どもと、私の子と世話してくれました。何ヶ月か前の「頼らんといて」のあの言葉は忘れたふりして、甘えたんです。でもそれでよかったなあと思ったし、そのことで、自分の子も母親は抱っこしてくれたし、面倒見てくれたし、お宮参りの時に初めて母が嫁ぎ先の家に来てくれました。短い時間やったけど、来てくれたことにすごい感謝もしたし、母の言葉を無視して甘えに行った、そのことが結果的にはよかったんかなって。兄の子も私の子も同じ孫として接してくれたのを見て、やはり孫の力というのは凄いなあと思ったし、産んで実家で母に甘えたということで、母へのわだかまりもちょっと解けて、私も育休をもらっていたし、近い距離だし、しょっちゅう連れて遊びに行けるようになりました。やはり子どもが生まれる前と後では全然違いました。退職していた母は大正琴を習い始めていたんです。そのサークルで「同和研修っていうのをせなあかんかって、同和研修に行ってきた」「誰々さんの話聞いて来たわ」って。私にそのことを言ってくれる、ということは「あゝ、変わって来たな」って思たんです。やっぱり、少しずつだけれども、変わろうとしているんだっていうことは分かったし、同じように孫をかわいがってくれたし、行き来もできるようになってありがたかった。それから何年か後に母が癌になって、後もう長くないという時に病室で苦しもうにしていたんですけど、私やはり最後に母に「結婚の時、どうやったの？」って「どんな思いしていたの？」どうしても母に聞きたかった。今、聞かないとチャンスはないなあって、でも病院のベッドで苦しんでいる母を前にして、そんな事突きつけられないと思って、『いいや！』って。孫を同じようにかわいがってくれたんだし、結婚の時にいろんなわだかまりもあって、辛い言葉も投げかけられたけど、もう今はそうじゃないしと、病気で苦しんでいる母を前にそんなこと話せなくてもいいや！って、そのまま母を見送りました。

結婚してから7年目くらいに結婚の時のこととかを話してくれないかって人から頼まれたんです。それまでは私、自分の結婚の時に母親が反対したこととか、自分自身しんどかったことを、絶対に話していなかったんです。その事を話すことは母を差別者にする事になると。母は教師として頑張って生きてきて、苦勞しながら私ら子ども3人育てて、本当にしんどい時期もあったと思うんです、おじいちゃん、おばあちゃんは離れた所に住んでいて、核家族の中で仕事をずっと続けてきたから、大変だったと思うんです。そういう母を全部否定してしまうことになる、そんなことできないと思って、ずっと喋れなかったんです。迷って、兄に相談したんです。兄は「お母さんは仏さんになって、天国に行ってお前のこと見守ってくれている。そやし今お前が頑張っていることをすればいいんや。絶対理解してくれるから」っ

て言ってくれたんです。それなら話してみようかなって、ずっとふり返って見たんです。ふり返って行く中で、母の生きてきた時代っていうのは、今よりもっと差別が厳しかっただろうなって、母も部落外で育っているの、そんな中で飛び交う部落に対する偏見っていっぱいあったんじゃないかなって、そういう中で部落に対するマイナスイメージを植え付けられてきたわけです。さっき言われたように世間体みたいなものに縛られていたところもあるだろうし、差別の厳しさみたいなものを、偏見みたいなものを自分は見聞きして体験しているからこそ、娘がそういう立場に置かれたらという、その心配をもしていたんじゃないかなあって。そういうことを考えていたら、やはり世間体に縛られていた母が苦しんでいた状況とか…言うたら簡単なんです、世間体にかんじがらめになって苦しむくらいなら、世間体なんかどうでもいいやみたいに、ぱ～んって解き放てたら母ももっと楽やったと思うけれども、それがなかなかできなかったから苦しんだんだと思うし、自分の結婚をふり返る中で、想像しながらだけでも母の人生にも思いを馳せることになって、“当時、どうだったんだろうなあ”って考えることができたんです。それはよかったなあと思うし、それは決して母の教師としての人生を否定することじゃないなって思ったんです。教師として一生懸命やって来たし、部落差別に対しては、私の結婚の時は確かに反対もしたし、差別者だったかもしれないけど、その後やっぱり分かるようにして、娘や孫のことを考えて行動するようになっていたし、変わってきたこともあったし、母を否定することには、ならないんじゃないかなって思えて、やっと人に母のことも自分自身のことも話せるようになったかなと思います。

山村さん 皆さん今の話聞いてホッとされたと思います。孫ができて行き来できるようになって、お母さんもホッとしてたん違うかなあとと思いますね。やはり意地もあるし、自分の中でいろいろ整理できない部分が言葉になって出てきたというのはあると思うんですけど。言葉を越える存在が出て来たというので、お母さんもつながることができて、向こう的にもホッとしたのではないかと思います。因みにうちの親も反対されていて、孫の私ができて実家と行き来できるようになったと言っていましたね。本当は解りたいけど、きっかけ探しているけど、うまく行かないというのはあると思います。無事に結婚できて子どもができて、その後地域の中で結婚して住んでいるところは解放運動しているところでもあるんですよ。結婚して地域のお父さん、お母さんとの関わり合いもありますし、そこに住むことで解放運動につながっていくことは自ずとあると思うのですが、解放運動との出会いとか、関わりを親の立場として地元の人とどうだったかということも含めて話して頂きたいと思います。(つづく)